

「神の本質の姿キリスト」 (ヘブル 1: 1-3)

「神は昔、預言者たちによって、多くの部分に分け、多くの方法で先祖たちに語られました。この終りの時には、御子にあって私たちに語られました。神は御子を万物の相続者として定め、御子によって世界を造られました。御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っております。御子は罪のきよめを成し遂げ、いと高き所で、大いなる力の右の座に着かれました。」

先ず、この手紙を学ぶに當り、例の5つのWでこの書の特徴を見ていきましょう。

- 1) 「What」これは何かと言えは「明かに手紙であります。最後の13章の終りに手紙特有の挨拶で終っています。しかしパウロの手紙のように冒頭の挨拶のことが省略されていて、いきなり本論から始まってまるで論文のようであります。手紙としてはかなり特殊であります。手紙の宛先は教会と不個人に特定されておらず、パルナナに住むエブヤ人全般に宛てられていて、この書のタイトルは無く、後代に「ヘブル人への手紙」と名付けられました。
- 2) 「Who」誰が書いたかですが、初めの頃は、内容的にパウロが著者とされていましたが、パウロとは文体が異なっているため、初代の教父たちや近代の学者たちによって多くの説があります。僕は3者に絞りました。①バルナバ説 ②アポロ説 ③プリスカ説。各々長一短があり決め手が無いのですが、私説としてはアポロが最もよく当てはまるように思われます。
- 3) 「When」いつ頃書かれたかと言くと、70年の前(前)。70年は、イスラエル王国がローマにより滅亡し、エルサレム神殿が破壊された年で、この大事件への説教がありませんから、パウロの殉教(64年か68年)より後で70年より少し前だと思われま。
- 4) 「Where」どこで著作されたかと言くと、イリヤのどこかだろうとされています。
- 5) 「How」どのような特徴を持つかと言えは、著者はエブヤ人であり、聖書(旧約)によく精通しており、ギリヤ語が堪能で、ギリヤ文化によく通じている「ヘレニスト」と呼ばれた教養人であり、雄弁で美しいギリヤ語の達人である。これらを総合すると「使徒の働き」で言及されているアホロが最も似つかぬ気がします。

さつそく1章1節から学んで行きたいと思ひます。冒頭の書き出しは、ヨハネ福音書1:1-3の「初めのことばがあった…」を思い出させますし、さらに創世記の冒頭のことばも連想させます。「神は昔、イスラエルの先祖たちに預言者たちを通して色々な時に、色々な方法で語られた」。これは、キリスト教が人間を主体とする「自然宗教」ではなく、神が始めた「啓示宗教」であることを示しています。預言者たちを通してあるときは夢やまぼろしである場合は、個人の実体験を通して示され、そして各々異った時代に啓示された。

ギリヤ語の美しい形容詞が使われている。「ポリュメロス」(多様な時)と「ポリュエトロポス」(多様な方法)である。「ポリュ」とは「多くの」の意で「モノ」(単一の)と比較される。音楽の語に「ポリフオニ」(複旋律)、「モノフオニ」(単旋律)などの例がある。「多くの」は英語では「ヴァライティ」と訳される。たとえば、アモスは羊飼いで、預言者だったが、彼は「神の義」を示した。ホセアは「神の愛」について彼自身の結婚生活から示され語った。イザヤは「聖なる神」を語り、エレミヤは「神の慈悲」について語った。各々の時代背景や事情が異なる中で、各々異った方法で神はエブヤの民に語られた。ところが「この終りの時には、御子によって語られた」とある。エブヤ人は世界の中で特別な「とき」の区別を持っていた。日常の人間のときと神のときの2つである。語りは変わるが、日本人は「歴史」が好きな国民である。これは永年の中国からの影響がある。

中国は「史記」などの歴史書が書かれた国であり、王朝の交代で歴史を学んだ。西洋では歴史の祖はギリシアである。そもそも「歴史」「ヒストリー」とはギリシア人が作った言葉であり、人間は神々が定めた運命の中で翻弄される。その時の流れが歴史である。ヘロドトスやツキディデスが歴史書を書いた。聖書は歴史の本そのものだが、皮肉にも聖書のヘブル語には歴史という語がない。

いや、「列王記」や「歴代誌」があるじゃないかと言うだろう。しかしあの歴代は「日々のことば」という意味である。そのヘブル語聖書がギリシア語に訳されたとき「歴史」という語に訳されたのであった。昔は人間を主体として神が語られてきたが、今の時代、即ち神の時代が始まる。神の国が完成に向うときが到来した。それは神のことが人となり、イエス・キリストとして世に生れたからである。ここに昔と今が対照されている。昔は神の色々な性質や本質が部分、部分に分けて、各々の時代に語られて来たが、今や、御子イエス・キリストの時となって、神の全容が完全な姿としてキリストを通して明らかに示された。キリストの愛、義、聖、善、智……等々は神の性質や本質を表わす。著者はやはり2つの美しいギリシア語を使っている。1つはイエスが神の栄光の「輝き」(アパウカスマ)である。この語は光の「放射」と「反射」の2つの意味があり、この場合はイエスが神の光の放射であり、第2義的には、信じる私たち信徒はその光を受け反射する輝きであるべきである。2つ目は、神の本質の完全な「現れ」(カラクテール)である。このギリシア語には「封印」と「印章」との意味がある。古代ローマ人は、手紙をろうで封じ、その上に指輪の印を押した。それは封印であり、また本人の名称の徴であり、本人を表す刻印であって本人を現わすものであった。古代メソポタミアでは粘土板に押された円筒印章は、回転して押すことで、そこに刻られた人物の姿が再現された。

イエスの中に神の本質の姿の現れがあった。セリボが、かつて主イエスに尋ねた、「父なる神を示して下さい。それが満足します」とすると主は言われた。「セリボ、そんなに長い間、あなたといはににいるのにわたしを知らないのか。わたしを見た人は、父を見たのです」と。私は大学時代「哲学」の講義を受けた。講師は有名な女優、榎山ふみえの父君の榎山教授だった。彼はギリシアのアトラン哲学の真髄を一言でこう説明した。「ギリシア人にとって、最高の幸せは、この世に生れて来なかった事。次に幸せなのは、生れてすぐに死ぬることである」と。これはアトランのイデア論を基にしている。最上のもはすべて神々の住む天界にあり、地上のものすべて悪であって、天上にあるものの写(コピー)である。これゆえギリシア哲学はペニシズム(悲観主義)である。この世の出来事は、運命に弄されるだけである。このイデア論を、この著者はよく知っていて、ヘブル人の本質はオプティシム(肯定的楽観主義)である。最上のもは天にあるが、その最上の神が地に降られ、人となられた。

パウロは、コロサイ1:15-16でこう書いている。「御子は見えぬ神のかたちであり、すべての造られたものより先に生れた方です。地上も天と地にあるすべてのものは見るものも見えぬものも、王座であれ、主権であれ、支配であり権威であれ、御子にあって造られたからです。万物は御子によって造られ、御子のために造れました。御子は万物に先立って存在し、万物は御子にあって成り立っています。」と言っています。こうして見ると「パウロは種をまき、アボロを水を注いだ。育てるのは神です。」とあるように、アボロもパウロと同じことをエタヤ人に、舌私たちに語っているのです。

この世で主イエスさまに出会い、信じ、彼を愛して生きる者は決してペニシズムに陥ることはなく、天上の神と生活するように、地上においても、すべてを最善なものとして下さる主イエスと共に歩む私たちは、患難の中でも決して目下ることなく、すべてを肯定的に、積極的に、前向きに生きる人生が完備されていることを私たちは覚えたいと思う。